

通信科「背信」

「まんじゅう怖い」

水野たわこ

人物

吉見仁(㊦) 作家

小林喜一郎(㊦) 吉見のマネージャー

○山小屋 室内

ロッジ風の小さな山小屋。

登山風の服装をした男が2人いる。

吉見仁(よし)が、窓の外の山の風景を眺めている。

お茶をいれているのは、小林喜一郎(42)。
お茶うけに、まんじゅうが2つある。

小林「あ…」

吉見「なに？」

小林「茶柱がたった…」

吉見「なんだ、そんな事」

吉見、また外の景色を眺める。

小林「先生」

吉見「ん？」

小林「これ(まんじゅう) 食べます？」

吉見「いいや。まだ」

小林「…」

吉見「こばちゃんが、食べたければ…」

小林「僕もまだいいです」

そのまま、茶柱を眺めている、小林。

吉見「(その間に耐えられなくなり)言いたいことがあるば…」

小林「いい事ありますよ、先生」

吉見「え？」

小林「だから、縁起が…」

吉見「縁起って…。いや、反省しているんだよ、俺だって。いくらファンとはいえ」

小林「誘われたんですか？」

吉見「いやまあ、」

小林「そうですよね。19の女の子はあんなホテルなんて行ったことないだろうし」

吉見「24って言ったんだよ、俺には」

小林「24…」

吉見「いま、計算しているだろ」

小林「それを信じたとして、1周りは違いますからね…」

吉見「…：そうだな、でも！」

小林「せんせい、いいです言わなくて」

吉見「…」

小林「こっちも、先生と同じ年なんで」

吉見「…ああ」

吉見、また、窓の外の景色をみる。

吉見「ここは、ホント、静かだな」

小林「ネットも繋がらないってのが、いいですよね」

吉見「よくこんな山小屋、さがしてきたな」

小林「ことり社のミキモトさんに教えてもらったんですよ」

吉見「へえ、あんな顔してこんな隠れ家、知ってるんだ」

小林「めちやくちや心配してましたよ」

吉見「ほんとかよ」

小林「また…」

吉見「次、ねぎられると思ってるからだろ」

小林「…」

吉見「なんだよ？」

小林「次の依頼、きますかね…」

吉見「…」

小林「いっちゃなんです、先生の読者、10代女子ですからね」

吉見「それがなんだよ」

小林「それが、未成年に手をだして」

吉見「出してない。だんじて出してない」

小林「しかも、こんなオッサンで」

吉見「それは仕方ないだろ。人は歳とるんだから」

小林「じゃあ、自分と同じように年取った人と恋愛してくださいよ」

吉見「したいよ、俺だって。でもいねえもん、そういう人」

小林「開き直った」

吉見「みんな変な下心ばっかなんだよ。俺の金しかみてねえし」

小林「じゃあ、あの子がお金めあてじゃなかったとか言えます？」

吉見「そりゃそうだよ。そうに決まってるだろ！」

小林「：さすがだ」

吉見「なんだよ」

小林「いや、そうですよね、^ちで純愛かける作

家はそうですね、うん」

吉見「お前その言い方：」

小林「小林です」

吉見「：なんだよ、急に」

小林「高校、いや中〰のときから一緒にいますけど、僕いま一番、先生に腹立ってます」

吉見「：」

小林「腹立つっていうか、怒り？これ、誰にむけてなんだろう」

小林、まんじゅうをみて、

小林「食べちゃおうかな、これ」

吉見「食べていいよ」

小林「先生に聞いてないです」

吉見「あ、そう」

小林、まんじゅうを手取るが、また戻す。

小林「：じゃあ、高3のときの、里中のことは何だったんですか」

吉見「なんだよ、急に」

小林「里中、ぜったい先生の事好きでしたよね」

吉見「知らないよ。俺、告白とかされてないし」

小林「見てたら誰だってわかるでしょ」

吉見「俺はわかんなかったよ」

小林「わかってたでしょ、でなきゃ、偶然に映画館であつたりしないし、なのに会ってないって里中いうし」

吉見「だってあつてねえもん、俺は」

小林「里中が嘘いつているっていうんですか？」

吉見「だっていなかったんだから、映画館には」

小林「でも、里中は」

吉見「俺が嘘ついてるってのかよ!」

小林「…」

吉見「俺と、里中とどっちが嘘ついてるって話
だろ、それ」

小林「…」

吉見「だいたい、お前が里中のこと好きだった
んじゃないのか？」

小林「…そういう風にみえてたんだ」

吉見「なんだよ」

小林「(まんじゅう見ながら) やっぱり食べよ

うかな：」

吉見「：ああ、くえよ、さっさと」

小林「里中に、確認したいですね」

吉見「：」

小林「まあ、いなくなっちゃったから無理だ
けど」

吉見「：」

小林「生きてますかね？どつかで」

吉見「わかんねえよ、そんなのは」

小林「主人公の彼女、ほんとに殺される展開で
したよね」

吉見「うん？」

小林「あれ、没にして、生きてることにして」

吉見「変更にしてよかったよ、それでヒットし
たんだし」

小林「でも、先生は、殺したかったんですよね」

吉見「いや、そうしたらあんなに売れなかった
ろ」

小林「売れる売れないじゃなくて、殺して終わ
りにしたかったんですよね？」

吉見「まあ、その時はそうだったんだろな」

小林「里中のこと書いてるって思ったんですよ、あれ読んだとき」

吉見「何、言って…」

小林「だって、里中は先生のこと好きで、そんな里中のこと僕はみていて、だから見ていた僕は、先生と里中うまくいけばいいかなって思ってた」

吉見「だから、里中とは何もなかったって」

小林「そういうの見たから、先生の小説について僕はいろいろ思う事ができたし、今もそれでここにいます」

吉見「関係ねえだろ、それはお前の妄想。俺は俺でいろいろ頭の中考えて、あれ書いて、あのラストでよかったと思ってんだよ」

小林「でも里中は！」

吉見「うるせえよ、里中の事好きだったのはお前だろ、そういうのすり替えて」

小林「すり替えてない！今回だって」

吉見「今回？」

小林「似てるでしょ、あの週刊誌のあの子、里中に」

吉見「……」

小林「先生、モテるのに全然、女つけなかったし、それは里中のことずっと思ってたから」

吉見「……こばちゃんはさ、そういう風に俺をみていたわけだ」

小林「僕が間違っていたんですか」

吉見「……」

小林、じつと吉見をみている。

吉見「……間違ってるねえよ」

小林「じゃあ、なんで今更、あんな若い子に」

吉見「それは、里中が好きだったから、かもな」

小林「やっぱり……」

吉見「言葉にすると、認めなきゃな思いつての、でてくるんだと」

小林「やっぱり、先生は小説家なんですね」

吉見「なんだよ、今更」

小林「今日、ここに来てよかったです」

吉見「……ああ」

小林「（まんじゅうみて）食べよっかな…」

吉見「こばちゃん、外みてこようか」

小林「え？」

吉見「なんか、急に青空の下で歩きたくなった」

小林「僕もしやべりすぎました」

吉見「そうだな」

小林「奥にいくと、滝がみえるらしいんですよ」

吉見「そうか」

小林「僕、そこ行ってみたいです」

小林、立ち上がっていそいそとリュック
を背負う。

吉見「先、いっててくれ」

小林「はい？」

吉見「あとから行くから」

× × ×

小林がいなくなった部屋。

吉見、まんじゅうに何かいれる。

吉見、窓の外をみて

吉見「遠いな、空は」

吉見、部屋からでていく。

了